

# 東アジアにおける 「アイルランド人」と民族自決運動

— ジョージ・ルイス・ショー (George Lewis Shaw) と  
朝鮮独立運動 —

山 田 朋 美

The 'Irish' and the national self-determination movement  
in East Asia:

The case of George Lewis Shaw  
and the Korean independence movement

YAMADA Tomomi

## はじめに

本稿の目的は、ジョージ・ルイス・ショー (George Lewis Shaw) を事例に、20 世紀前半の東アジアにおいて、アイルランド人がどのように民族自決運動に関わったのかを考察することにある。イギリス支配への長期にわたる闘争のため、20 世紀前半の東アジアにおいては、アイルランド人に対して「反英」、「反帝国主義」のイメージが抱かれることがあった。例えば、1941 年にニム・ウェールズが出版したルポタージュ『アリランの歌 (Song of Ariran)』には、アイルランド人テロリストの Sao と呼ばれる人物が登場する<sup>1</sup>が、そのモデルとされているのが、ジョージ・ルイス・ショーである<sup>2</sup>。彼は朝鮮独立運動で果たした功績が評価され、1963 年に韓国政府から建国勲章独立賞を授与された人物として知られている<sup>3</sup>。その一方で、長らく彼の活動の実態には明らかにされていない部分が多かった。そのような中でショーの活動の詳細を明らかにしたのが韓哲昊である<sup>4</sup>。韓哲昊は、朝鮮独立運動の実像のさらなる解明と、その世界的な意義を示すため、韓国側の資料に加え、日本の外務省外交資料館所蔵の関連資料を主に用いながら<sup>5</sup>、ショーの朝鮮独立運動への貢献を具体的に示した<sup>6</sup>。それに対し、本稿はショーが朝鮮独立運動に携わった背景の考察を目的とする。朝鮮独立運動に携わっていた当時から、ショーはイギリス国籍を持つ「アイルランド人」として知られ、その

朝鮮独立運動との関わりは「アイルランド人」が同じような境遇を持つ朝鮮人に共感したゆえの行動と受け取られてきた。しかし、後述するように、彼はイギリス、アイルランドに加え日本にもルーツを持ち、生まれ育ったのは清の福州である。しかし、これまでの研究では、ショーがそのような複雑なルーツを持つことの意味については重視されてこなかった。その理由の一つとして挙げられるのは、資料上の限界である。ショーの甥の1人であり、一族のファミリーヒストリーを調べていたカナダ人ジャーナリストのピーター・ストラスバーク(Peter Stursberg)によると、ショーは自身のアイルランド人としてのルーツに関する資料を収集していたものの、それらは彼が1943年に福州で亡くなった際、戦争の混乱の内に全て失われたとされている<sup>7</sup>。そこで、本論文では、ショーが朝鮮独立運動に加担したとして逮捕されたことに端を発する「ショー事件」に着目し、この事件に関する朝鮮総督府・日本政府・イギリス政府作成の資料や、新聞記事等からショーに関する様々な情報を掘り取り、複雑なルーツを持つショーが「アイルランド人」として朝鮮独立運動に関わるようになった背景とその意味を考察する。

## 1. 「ショー事件」の推移

ショーと朝鮮独立運動の関わりを明らかにするために、まずは「ショー事件」の概要について説明する。この事件は、日本のみならず朝鮮やイギリスでも報じられ、朝鮮独立運動の協力者として彼の名が一般に知られるきっかけともなった。本章では韓哲昊の研究に依拠しつつ、外務省外交資料館所蔵の「英人『シャウ』逮捕一件」の内の別資料や、朝鮮総督府関係者の録音記録を書き起こした資料<sup>8</sup>を用いて「ショー事件」の概要を再構成する。

### 1-1. ジョージ・ルイス・ショーの逮捕

ジョージ・ルイス・ショーが朝鮮独立運動に携わっていたとして逮捕されたのは、1920年7月12日のことであった。その直接的なきっかけは、日本から来た妻子を迎えにショーが新義州<sup>9</sup>を訪れた帰路、彼が旅券を携行していないことが発覚したためとされている。日本外務本省が大正9年9月15日付で作成し、関係する各在外公館（在英大使館、在米大使館、奉天領事館、安東領事館、天津領事館、上海領事館）宛てに送付した機密文書に添付された資料の一つである「『シャウ』事件ニ関スル経過ノ概要」にまとめられているところによると、ショー逮捕の経緯は以下の通りである。7月11日午後、ショーは安東駅からの鉄道で朝鮮へ向かった。目的地であった新義州は日本統治下の朝鮮にあったため、ショーは旅券の発行をその場にいた巡査に求めたものの、業務外だとして断られたため、旅券のないまま乗車し朝鮮へ入った。そして、その帰路で旅券の不携行を官憲により「発見」され、新義州駅で下車を命じられたという。その後、任意で新義州警察署に連行され取調べを受けた結果、同署が扱っていた呉学洙事件に関係していること、また、かねてより「不逞鮮人ノ陰謀及至ノ暴動

ヲ幫助」していたこと等、容疑が複数あることが明らかになったため、新義州警察署長は朝鮮刑事令第13条に基づきショーの14日間の留置を命じた<sup>10</sup>。

しかし、日本側の資料で説明されている通りショーの逮捕が偶然かといえ、それは疑わしい<sup>11</sup>。というのも、朝鮮総督府は以前からショーの動向を注視していたためである。韓哲昊によると、1919年5月頃には上海臨時政府の交通部安東支部を、ショーが安東県のイギリス租界地内で経営していた怡隆洋行内に設置しようという試みがなされていたという<sup>12</sup>。さらに、1920年2月、そして5月には、相次いで同社内に潜伏していた独立運動家が逮捕され、ショーと彼らの関わりも指摘された<sup>13</sup>。つまり、朝鮮総督府は以前よりショーと朝鮮独立運動家達との関係を認識しており、ショーが旅券を携行しなかったことをきっかけに、兼ねてより機会を窺っていたショーの逮捕を決行したと推測される。京義道警察部長であった千葉了も、当時すでに朝鮮総督府側はショーと朝鮮独立運動の関わりを認知していたものの、外国人であるショーを逮捕できずにいたこと、旅券を携行せずにショーが朝鮮に入り新義州の警察で取り調べを受けているとの報告を聞いた赤池警務局長がこれを喜び、内乱罪を問うためその身柄の京城移送を命令したことを、1961年に回想している<sup>14</sup>。

その後、ショーは自らの会社を利用して朝鮮独立運動を助けたこと、1919年11月の李垺公の亡命計画への関与<sup>15</sup>、1919年7月からおよそ1年にわたり様々な方法で朝鮮人の「内乱行為」を助けたことなどを罪状とし、内乱罪で起訴された<sup>16</sup>。

## 1-2. ショー事件の「解決」

ショーの逮捕は朝鮮総督府の念願であったが、それが及ぼす影響は彼らの想定以上であった。イギリスは、これを中国における自国の権益及び自国民の保護を脅かすものであるとみなし、政府や在外公館からのみならず、在上海イギリス商業会議所からも抗議が寄せられた他<sup>17</sup>、東アジア各地で発刊されている英字新聞上ではこれに対する厳しい批判が展開された<sup>18</sup>。

多方面からの想定以上の批判に対し、日本政府は事態の收拾に努めた。まず、イギリス政府に対しては、今回の件は国外における外国人の犯罪を処罰することができるかどうかの法的問題であること、そして「英米主義」をとるイギリスと「大陸主義」をとる日本とでは「斯種事件ニ関スル法律觀念カ吾人ノ有スルモノト著シク相違スル」こと、しかし日本のような「大陸主義」を採る国が「文明国」では大多数を占めることを繰り返し主張した<sup>19</sup>。上海のイギリス商業会議所からの批判に対しては、自国の「安寧」を脅かす者を日本はいつでも逮捕審問する権利があること、また日本政府は「日英間従来ノ親交ニ顧ミ」英国領事にショーの従来行動を「深甚ナル警告ヲ為シタル」よう依頼したものの、その行動は改まらなかったと反論している<sup>20</sup>。

法的側面からの主張を繰り返す日本政府と、外交的解決を求めるイギリス政府の話し合いは当然ながら平行線を辿った。そこで両者はショーの逮捕から約2ヶ月经過したところで、大局を鑑み妥協策を模索することにした<sup>21</sup>。内田外務大臣は朝鮮総督府に使者を送り、対応

策を検討し、この動きを受けて朝鮮総督府内でも対応が話し合われた。9月27日には、朝鮮総督府総督室で、齋藤総督、水野総監、横田司法局長、山梨大佐が対応を話し合い、ショーが今後安東県に住まないこと、朝鮮独立運動に一切関係しないこと、後者に関してはイギリス側がこれを文書で保障することを条件に、ショーの保釈を認めるとした。その後、10月19日に齋藤朝鮮総督、原敬首相、内田外務大臣がショーの逮捕に端を発する一連の問題について協議をし、最終的には在日イギリス大使に駐京城イギリス領事を通してショーに保釈およびその条件を受け入れるように説得することを認めた。その結果、11月4日に京城高等裁判所の予審判事は、補償金をかけてショーの保釈を許可し、11月9日、彼は4ヶ月間にわたる拘禁を経て保釈されたのであった<sup>22</sup>。

## 2. 朝鮮独立運動への関与の動機

ジョージ・ルイス・ショーは、なぜ危険を冒してまで、朝鮮独立運動に関わったのだろうか。その動機を直接的に示す彼自身の手による資料は管見のところ存在しないため、ショーの子孫であるストラスバーグによる著作と、英国国立公文書館所蔵の外交資料<sup>23</sup>、新聞等を用い、ショーの周囲の人物の証言からとはなるが、彼が朝鮮独立運動に関わるようになった背景を考察する。

### 2-1. 中国における「イギリス人」居留民としての利害関係

ジョージ・ルイス・ショーが朝鮮独立運動に加わった理由の一つとして、まずはその「反日姿勢」が挙げられる。ショーが「反日」であったことは当時から広く知られており、それは日本側の資料でも、イギリス側の資料でも確認することができる。例えば、日本側の資料ではショーを「平素熾烈ナル排日感情ヲ懷キ居ル者」と評しており<sup>24</sup>、またショーを直接知るイギリス人外交官も“Mr. Shaw is a man without tact who has never attempted to conceal his dislike of his Japanese and Japanese methods.”と説明している<sup>25</sup>。さらには彼の弟までもが、ショーが“very anti-Japanese”であることを認めていた。ここでは、ショーが「反日」となった背景を、その出自と当時の国際情勢から考察する。

ショーが「反日」となった背景の一つとして考えられるのが、彼が中国では「イギリス人」居留民であったということである。ジョージ・ルイス・ショーは、1880年1月25日、清の福州にアングロ・アイリッシュのサミュエル・ルイス・ショー (Samuel Lewis Shaw) とエレン・オシー (Ellen O'Shea) の第一子として生まれた。イギリス国籍の父を持つショーは、当然ながら中国において特権を持つ居留民として暮らしていた。彼は、幼少期を福州のパゴダ・アンカレジ (Pagoda Anchorage) で過ごしたのだが、その暮らしは、当時の中国にある外国人居留地に住むイギリス人家庭がそうであったように、多くの中国人の使用人、乳母、庭師に囲まれたものであった<sup>26</sup>。他方で、租界に住むイギリス人は、中国社会や文化と物理的・

精神的に隔たれているのが一般的で、それはショー家も同様であった。料理人は常にイギリス料理を作り、中華料理は決して食卓に上がることはなく、また子供たちも使用人の子供たちから中国語を習ってはいたものの、家庭内ではそれを口にするには許されなかった。またショーとその兄弟たちは、自由な外出も許されていなかった。このように中国社会から切り離された租界の「イギリス人」の世界でショーは生活していた<sup>27</sup>。

社会に出てからも、彼はイギリス人居留民のコミュニティー内にあった。上海にあるイギリス人のフリーメイソンが経営する寄宿学校で学んだ後<sup>28</sup>、ショーは若くして働き始め、ビジネスで大きな成功を収めた<sup>29</sup>。ショーのビジネス上のキャリアについては未だ不明な点も多いが、韓哲昊によると、1900年頃からイギリスが権益を持っていた朝鮮の金鉉で会計として働き始めたと推定される。そして、1907年頃には前述の怡隆洋行を設立した。この会社は上海にある太古船公社の代理店兼貿易会社で、安東と上海を航路で繋ぎ物資の輸送等を行なった<sup>30</sup>。この怡隆洋行は成功を収め、ショーは現地では有名な裕福な商人となった。このように、明らかになっている範囲からは、ショーは租界の「イギリス人」としての特権を享受する人生を東アジアで送っていたことがわかる。

しかし、この中国におけるイギリスの圧倒的優位は、1870年代に日本が上海に進出したことで揺らぎ始める。1895年に下関条約を結んだことによって、日本は欧米諸国同様最恵国待遇で迎えらるる国となった。そして、日露戦争後の本格的な資本進出に伴い上海租界の日本人人口は増加の途を辿り、1915年にはそれまで最大の勢力を誇っていたイギリス人の人口を上回るまでになった<sup>31</sup>。加えて、第一次世界大戦で敵国となったドイツに代わり市参事会メンバーになる等、現地の日本人は租界行政にも参入していった。このように、上海租界で日本は存在感を増していったが、他方で租界行政は依然としてイギリス人が実権を握り、参事会でも日本人はイギリス人やアメリカ人とは同等に扱われないなど<sup>32</sup>、両者の間には、勢力を伸ばしつつある後発の帝国主義国と自国の権益の維持を図る先発の帝国主義国という対立の構図が生まれた。日本本国政府は中国における更なる権益拡大を狙い、第一次世界大戦中の1915年1月に対華二十一箇条要求を中国に突きつけた。当初、イギリスを含む列強はこれを黙認したが、袁世凱政府が中国を保護国化する内容を含む第五項を暴露すると、日本に対する国際的な批判と不信が一気に高まった。それはイギリスにおいても同様で、一部の新聞では、日本に対する厳しい意見が示された<sup>33</sup>。

このように後発の帝国主義国である日本が中国に進出することで、これまで優位を占めていたイギリス人との間に対立の構造が生じるようになった。特に在上海イギリス商業会議所は「反日的」な性格で知られており、日本製品のボイコット運動などを積極的に展開していた。そしてショーがビジネスを始めたのも、ちょうど日本が中国へのさらなる進出を試みている時期と重なっており、同会議所の会員として活動し、その中でも一段と「反日的」であったとされている<sup>34</sup>。ショーの弟も、兄が「反日的」な理由として、長年にわたって日本人とビジネスで対立関係にあったこと、ショーが日本人との取引の一切を拒否し日本人から反発を



買っていたことを在京城イギリス領事に説明している<sup>35</sup>。駐奉天イギリス領事館も、ショーと日本人の対立を、日本人がショーの成功に嫉妬したためと捉えていた。同領事館は、日本人が過去何年にもわたって彼のビジネスを組織的に妨害しようとしていたことも報告している<sup>36</sup>。つまり、ショーは租界の「イギリス人」として、中国や朝鮮半島で自国の権益をさらに伸ばそうとする日本と対立関係にあり、それゆえ日本に対しても悪いイメージを抱いていたと考えられる。このような構図の中、同じく日本という共通の敵を持つ上海の朝鮮独立運動家と「反日的」なショーの間に接点が生まれ両者が協力関係となることも自然なことのよう推察される。

## 2-2. 「アイルランド人」としてのアイデンティティ

ショーが朝鮮独立運動に関わった二つ目の理由として朝鮮人に対する同情心が挙げられる。その背景として、「ショー事件」が起こった当時から、彼の「アイルランド人」としてのアイデンティティが度々指摘されてきた。例えば、ショーを逮捕した際の日本側の資料では、その動機が「自己カ英国愛蘭人ナル所ヨリ朝鮮人ノ現時ノ境遇ニ対シ有スル厚キ同情心」にあると説明されている<sup>37</sup>。また、時代は下るが、1931年に朝鮮総督府から出版された『朝鮮独立思想運動の変遷』でも、ショーは「愛蘭人」と記されている<sup>38</sup>。

その程度はわからないが、ショー自身も「アイルランド人」としてのアイデンティティを持っていたことを窺わせる情報もいくつかある。例えば、ストラスバーグによると、ショーは1900年頃には自身の「アイルランド人」としてのルーツを意識していたようだ。彼は高齢の父のために20代で中国に家を購入したのだが、アイルランド人の先祖がダブリン郊外に所有していた土地に因んでこれをテレニユア（Terenure）と名付けた<sup>39</sup>。また、ショーは、自身のルーツを調べるために、アイルランドでショー家ゆかりの地を訪れ、先祖について調べたこともあったという<sup>40</sup>。これらのエピソードからは、彼は社会に出た後、自身とアイルランドのつながりを重視していたことが窺える。また、ショーが「アイルランド人」を自認していたとの証言もある。駐京城イギリス総領事のアーサー・レイ（Arthur Hyde Ray）が伝え聞いたところによると、ショーは警察による取調べ中に朝鮮独立を支持するかを尋ねられたのに対し、アイルランド人としてアイルランドの独立を支持しているのと同様に、朝鮮独立も支持している答えたとされている<sup>41</sup>。加えて、1920年8月11日付けの『京城日報』<sup>42</sup>と『東亜日報』<sup>43</sup>は、自身がアイルランド人であるため同じ境遇の朝鮮人に同情したとショーが述べたと報じた<sup>44</sup>。

「アイルランド人」としてのアイデンティティがショーを朝鮮独立運動に加担させたという説明は、当時は説得力を持って捉えられたと考えられる。ショーが逮捕される前年の1919年にはアイルランド共和国の独立が宣言され、対英独立戦争が始まり、その経過は日本でも度々報じられていた。特に、1920年に朝鮮で創刊された『朝鮮日報』や『東亜日報』ではアイルランド独立運動の様子が頻繁に報じられた。その件数は、ショーが逮捕された1920年には『朝鮮日報』で89件、『東亜日報』で170件に登る<sup>45</sup>。その中には、朝鮮とアイルランド

を重ね合わせたり、比較して報じるものも少なくなかった<sup>46</sup>。その背景には、1919年3月に三・一独立運動が起こったこと、第一次世界大戦中から植民地支配ナショナリズムが高まりを見せていたこと、さらにアメリカにおいてアイルランドをはじめとする被支配民族による独立支持を求める運動が積極的に展開されていたことなど、国際的な要因があったと考えられる。こうした状況下では、人々が朝鮮独立運動に関わったショーの「アイルランド人」としてのルーツに着目するのは自然なことであったと言える。

それでは、ショーが「アイルランド人」としてのアイデンティティを抱くに至った背景には何があるのであろう。可能性としてまず考えられるのは、ショーの父サミュエル出自である<sup>47</sup>。サミュエルは1821年にイングランドのハムステッドにリース・ショー (Lees Shaw) とキャロライン・チップェンダル (Caroline Chippendall) の間に生まれた。祖父はダブリンのブッシー・パーク (Bushey Park)、そしてテレニューアのロバート・ショー (Robert Shaw) である。ロバート・ショーは金融の専門家として財を築いた人物で、王立アイルランド銀行 (Royal Bank of Ireland) の共同創設者の一人でもあった。ショー家の歴史は、ボイン川の戦いで活躍したウィリアム・ホワイト (William White) にまで遡る。サミュエルはこの家系を誇りに思い、自らがプロテスタント・アセンダンシーの家系の出であることを積極的に疎開地の社会で発信していたようだ<sup>48</sup>。つまり、アイルランドにルーツがあるとはいっても、サミュエルのそれは特権を持つ立場としてのアイデンティティであったと考えられる。これは、ショーの朝鮮人に対する同情心の背景として指摘される被支配民族であった「アイルランド人」としてのアイデンティティの源泉を父サミュエルに求めることは難しいことを意味している。列強により半植民地化された中国において、自らがアイルランドにおける特権階級の流れを引くことを誇り、帝国主義国の一員としての特権を享受していたサミュエルには、朝鮮人に対して同情を抱きうるような「アイルランド人」としての側面は見当たらない<sup>49</sup>。そこで、次にショーがユーラジアン (Eurasian) でもあったという事実に着目する。

### 2-3. ユーラジアンとしての立場

ユーラジアンとは、欧米人とアジア人の混血を指す言葉である。ショーの母であるエレンは、アイルランド風の名を持っていたが、実際は日本人であったとされており<sup>50</sup>、それゆえショーはユーラジアンであった。

ユーラジアンは当時差別の対象とされていた。ショーの両親も対等な関係とは言えず、家庭においてエレンの「日本人らしさ」は徹底的に抑圧されていた。サミュエルは自身の末弟フレッド (Frederick Arrowsmith) の妻メアリー・エレン・クレア・ショー (Mary Ellen Claire Shaw) にちなみ、日本人の妻にアイルランド名をつけた<sup>51</sup>。エレンは、自宅で日本語を話すことを禁じられ、彼女も自身の家族について家庭内で話題にすることは一切なく、エレンの孫たちは、彼女のことをスペイン系のアイルランド人だと信じていたほどであったという<sup>52</sup>。

このようにエレンが「日本人らしさ」を徹底的に抑圧されていた背景には、当時の中国に

おけるイギリス人居留民にとって「イギリス人」であることの維持が最も重要であったことが影響していると考えられる。大英帝国の一員として特権を享受しつつも、圧倒的多数の中国人に囲まれ同化の危機を常を感じる中で、イギリス人居留民たちは、現地の中国人や中国的なものから距離をとることで、自らの「イギリス人らしさ」を守ろうとした。そのような状況でイギリス人と中国人の結婚は「イギリス人」らしさを脅かすものと見做された。サミュエルとエレンが結婚した19世紀後半は、上海などの大都市においては、白人女性の数が白人男性に比して少なかったため、イギリス人と中国人が結婚することはさほど珍しくなかったようである。しかし、その後20世紀に入ると、中国人と結婚するイギリス人に対しては「イギリス人らしさ」を揺るがすとして厳しい視線が向けられるようになり、1920年代になると租界に住むイギリス人が現地人やユーラジアンと結婚することは受け入れられない風潮ができあがった<sup>53</sup>。エレンは日本人ではあったが、当然ながらアジア人として中国人と同一視されたであろうし、その息子でありアジア人と認識される容貌をしていたショーもユーラジアンとして差別や偏見にさらされたであろう。当時、ユーラジアンが差別されたりコミュニティから疎外されたりしたエピソードは多数ある。例えば、ハリエット・サージェントによる『上海』では、ユーラジアンの騎手が仲間からその出自を理由に不当な扱いを受ける様子が描かれている<sup>54</sup>。事実、「ショー事件」が起こった際、駐日イギリス大使であったチャールズ・エリオット(Charles Elliot)も、ショーの「罪」として、朝鮮政治に干渉していること、イギリス人として不誠実であることに加え、ユーラジアンであることを挙げている<sup>55</sup>。ここからは、ショーが東アジアにおけるイギリス人コミュニティでは、ユーラジアンとして認識されていたこと、またそれゆえにより感情を抱かれていなかったことが窺える<sup>56</sup>。差別される経験が、同じ立場にいる者たちに同情を抱かせ、行動を伴う共感を生むのだとすれば、ショーが差別の対象であったユーラジアンの立場に置かれていたことも、朝鮮人に対する同情心につながり、朝鮮独立運動に関わっていく動機の一つと解釈することも可能なのではないだろうか。

## おわりに

イギリス国籍を持つ「アイルランド人」として知られ、朝鮮独立運動に関わったジョージ・ルイス・ショーは、複雑なアイデンティティを持つ人物であった。彼には、中国におけるイギリス租界地の居留民として特権を持つ「イギリス人」としての側面、反帝国主義的な「アイルランド人」としての側面、そして差別の対象とされていたユーラジアンとしての側面があった。元来アイデンティティというのは重層的なものであるが、それでも1人の人間の内にこのように相反するアイデンティティが混在するのは興味深い。最後に、ショーの複雑なアイデンティティを構成した当時の国際関係の構造と、東アジアにおける「アイルランド人」と民族自決運動の関係について考察したい。

まず、第一に挙げられるのは、帝国主義の支配構造の複雑さである。「アイルランド人」は、



本国においては支配される側であるものの、一歩外に出ると、植民地の人々を支配する側に立った<sup>57</sup>。それは中国の租界でも同様で、「アイルランド人」は現地では「イギリス人」として特権を持ち社会階層の上層部に位置した。その立場は、東アジア、特に中国という列強が権益を奪い合う場ではより複雑なものになった。第一次世界大戦に乗じて中国での権益をさらに拡大しようとする日本の行動は、すでに現地で権益を確保していたイギリス人居民にとって、自身の利益を脅かすことを意味した。そのような日本に対する反発は、ショーの事例に関して言えば、同じ東アジアで日本の植民地支配に反発する朝鮮人への「協力」という形に転じることとなった。つまり、東アジアにおいては新興の帝国主義国であった日本がさらなる権益を要求したことにより、帝国主義支配から恩恵を得ている立場にある者、すなわちショーと、抑圧・搾取される立場の朝鮮独立運動家が手を取り合うという奇妙な協力関係が生じることになったと言える。

他方で、イギリス支配に抵抗してきたアイルランドの事例は、アイルランドが反帝国主義であるという印象を広く世界に与えた。独立を目指す諸民族にとって、それをモデルとするか反面教師とするかは別として、アイルランドは重要な参照例となり、日本のような植民地を抱える国にとってもアイルランド情勢は自国の植民地統治の行く末を占う上で、重要な調査対象の一つとなった<sup>58</sup>。特に1916年のイースター蜂起以降、武力闘争がアイリッシュ・ナショナリズムの前面に出てくることで、アイルランドに対する関心はより高まった。当時、新聞や雑誌で繰り返し伝えられるアイルランド関連のニュースを目にしていた者が「アイルランド人＝反帝国主義者、民族自決運動の先駆者」というイメージを持ったであろうことは想像に難くない。特に日本や朝鮮半島では、隣接する国の植民地支配を受けているという点で、アイルランドと朝鮮の間に共通点があると見做されることも少なくなかった<sup>59</sup>。

そして、このアイルランド・アイルランド人に対する単純化されたイメージは、上述の東アジアにおける「アイルランド人」の複雑な立場から焦点をずらすことにつながっていたのではあるまいか。ショーの事例で考えると、独立運動に関与している間は、彼の複数の属性の中でも特にその「アイルランド人」としての側面が強調されるのである。特に、朝鮮独立運動家や朝鮮総督府にとって、実際に朝鮮独立運動に協力するショーは紛れもなく、租界の「イギリス人」居民でも「混血児」として蔑まれるユーラジアンでもなく、反帝国主義的でヒロイックな「アイルランド人」であっただろう。また、ショーも自身のアイルランドとの繋がりを意識すると、同じように帝国主義国の抑圧に苦しむ朝鮮の人々への共感もより強くなったことであろう。逆にいうと、朝鮮独立運動と関わることで、ショーはより「アイルランド人」としての自己を確立し得たと解釈することも可能なのではないだろうか。

本稿は、2016年度アイルランド研究年次大会における報告「日本の朝鮮統治と『ショー事件』」に大幅な加筆・修正を加えたものである。報告に対し、貴重なご指摘・ご助言をくださった先生方にお礼を申し上げます。

## 注

- 1 Sao は、呉成崙が建物の爆破や日本人官吏を暗殺する計画を立て、200 個の爆弾を朝鮮に内密に輸送するという場面で登場する。Kim San and Nym Wales, *Song of Ariran: The Life Story of a Korean Rabel*, (New York: John Day, 1941), p.63.
- 2 ニム・ウェールズ、キム・サン共著『アリランの歌』松平い子訳、岩波文庫、1987 年、p.403。
- 3 1963 年の時点ではショーはすでに亡くなっており、また彼の子孫も確認できなかったため、韓国政府は本人に勲章を授与することはできなかった。その後、2012 年 8 月 15 日に、ショーの孫に当たるマジョリー・ハッチングス (Majorie Hutchings) と、曾孫にあたるレイチェル・サッシ (Rachel Sassi) に建国勲章が授与された。国家報勲処 (국가보훈처)、「『조지 쇼우』 50 년만의 훈장 전수 (‘ジョージ・ショウ’、50 年ぶりに勲章授与)」、2010 年 8 月 10 日。  
<https://www.mpva.go.kr/mpva/selectBbsNttView.do?key=77&bbsNo=16&nttNo=4453> (アクセス日：2021 年 10 月 1 日)。また、この勲章の授与をきっかけに、ショーは韓国社会で再び脚光を浴び、KBS の歴史紹介番組の「역사스페셜 (歴史スペシャル)」で取り上げられたり、その経歴が各種記事で紹介されたりした。
- 4 韓哲昊「조지 엘 쇼 (George L. Shaw) 의 한국독립운동 지원활동과 그 의의 : 체포·석방 과정을 중심으로 (‘ジョージ・エル・ショー (George L. Shaw) の韓国独立運動支援活動とその意義 : 逮捕・釈放過程を中心に)」『한국근현대사연구 (韓国近現代史研究)』제 38 권, 2006 年 9 月。
- 5 韓哲昊は、新たな資料として、主に「英人『シャウ』逮捕一件」を使用している。同資料は麻布の外務省外交史料館に収蔵されている資料で、全 3 冊から構成されている。ショーの逮捕から、イギリスとの間で彼の処遇の合意に至るまでのやり取りを中心とした記録が収められている。外務省記録「英人『シャウ』逮捕一件」、4.1.5.12、外務省外交史料館。
- 6 韓哲昊、前掲論文。韓哲昊のショーに関する研究としては、他に「1920 년대 전반 조지 엘 쇼 (George L. Shaw) 의 한국독립운동 지원활동과 그 의의 — 1920 년 11 월 석방 이후를 중심으로 — (1920 年代前半、ジョージ・エル・ショー (George L. Shaw) の韓国独立運動支援活動とその意義 — 1920 年 11 月釈放後を中心に —)」『한국사연구회보 제 160 호 2013 년 봄호 (韓国史研究彙報 第 160 号 2013 年春号)、2012 年や、「1930 년대 일제의 조지 엘 쇼 (George L. Shaw) 탄압, 축출공작과 그 성격 (1930 年代、日本のジョージ・エル・ショー (George L. Shaw) 弾圧・追放工作とその性格)」(『한국사연구회보 제 156 호 2012 년 봄호 (韓国史研究彙報 第 156 号 2012 年春号)、2011 年』が挙げられる。
- 7 ピーター・ストラスバーグ (Peter Stursberg, 1913-2014) はカナダ出身のジャーナリストで、母方の祖母メアリーがショーの妹であった。彼は 1970 年代から家族に関する公的記録の発掘や親戚へのインタビューを行い、日本人研究者の助力も得て前述書を完成させた。著作の中でストラスバーグはショーを “Uncle G” と記している。Stursberg, Peter, *No Foreign Bones in China: Memories of Imperialism and Its Ending*, The University of Alberta Press, 2002, pp. ix-x, 4-5.
- 8 友邦文庫に収められている朝鮮総督府の元警察官僚等が自らの経験を回顧したものを録音した記録を、活字化したものである。宮田節子監修、河かおる解説「未公開資料 朝鮮総督府関係者 録音記録 (4) 学習院大学東洋文化研究所蔵 友邦文庫 民族運動と「治安」対策」『東洋文化研究』第 5 号、2003 年、pp.199-426。
- 9 平安北道北西端に位置し、中国と国境を接する。
- 10 内田外務大臣発在中國公使他宛機密合送第 93 号「ショウ逮捕二関スル件」、大正 9 年 9 月 16 日発、外務省記録「英人『シャウ』逮捕一件」第 1 巻、4.1.5.12、外務省外交史料館。
- 11 「『ショウ』事件二関スル経過ノ概要」には、「偶々列車檢閲ノ総督府巡査ノ為メ旅券ヲ携帯セサルコトヲ發見セラレ」と記されている。同上書。また、韓哲昊もショーの逮捕を計画的なものと推測している。韓哲昊、前掲論文、2006 年、pp.17-21。
- 12 韓哲昊、同論文、p.14。
- 13 高警第 2751 号、「大韓民国臨時政府の職員検挙の件」、大正 9 年 2 月 14 日、金正明編『朝鮮独立運動 1 分冊 民族主義運動編』原書房、1964 年、pp.285-287。高警第 14658 号「大韓民国臨時政府の文書中継者検挙の件」、大正 9 年 5 月 29 日、同上書、p.429。
- 14 宮田、前掲資料、pp.295-296。

- 15 ショーが経営している怡隆洋行に一旦李珣公を潜伏させ、その後同社所有の汽船で上海に渡航する計画があったとされる。内田外務大臣発在英日本大使館林大使宛電信第 8351 号、大正 9 年 9 月 22 日発、外務省記録「英人『シャウ』逮捕一件」第 1 巻、4. 1. 5. 12、外務省外交史料館。
- 16 ショーが実際に朝鮮独立運動に関わったということは、韓国側の資料から明らかになっている。しかし、当時の警察はショーを逮捕・起訴するに足る証拠を十分に抑えていなかったことを、千葉やイギリス側も記している。宮田、前掲資料、pp.296-298. The National Archive, Kew (TNA henthforth), FO228/2972, from Wilkinson to Clive, 12<sup>th</sup> July 1920.
- 17 韓哲昊、前掲論文、2006 年、pp.25-29. O'Connor, Peter, *The English-language Press Networks of East Asia, 1918-1945*, Global Oriental, 2010, p.161.
- 18 Peter O'Connor, *The English-language Press Networks of East Asia, 1918-1945*, Global Oriental, 2010, p.161.
- 19 日本はその一例として、イギリスが「Fenian trouble ノ際帰化米人ヲ英国ニ於テ逮捕シタルコトアリ」と指摘している。内田外務大臣発在中国公使他宛機密合送第 93 号「『ショー』事件ニ関スル誤報謬説ノ辯駁」、大正 9 年 9 月 16 日発、外務省記録「英人『シャウ』逮捕一件」第 1 巻、4. 1. 5. 12、外務省外交史料館。実際、京城イギリス領事館はショーに朝鮮独立運動家等を援助しないよう何度も警告をしたが、ショーの行動を変えるには至らなかった。TNA, FO228/2972, from Lay to Clive, 27<sup>th</sup> July 1920.
- 20 林駐英大使発内田外務大臣宛第 815 号、大正 9 年 9 月 18 日発、外務省記録「英人『シャウ』逮捕一件」第 1 巻、4. 1. 5. 12、外務省外交史料館。
- 21 内田外務大臣発林駐英大使宛、大正 9 年 9 月 20 日、外務省記録「英人『シャウ』逮捕一件」第 1 巻、4. 1. 5. 12、外務省外交史料館。ショーの保釈案が外部に漏れると世間の反発を招くであろうことを鑑み、一連のやりとりは秘密裏に行われた。内田外務大臣発朝鮮総督宛第 101 号（極秘）、大正 9 年 9 月 23 日、外務省記録「英人『シャウ』逮捕一件」第 1 巻、4. 1. 5. 12、外務省外交史料館。
- 22 韓哲昊、前掲書、2006 年、pp.32-36。
- 23 英国国立公文書館に所蔵されているショーに関する資料の主なものに、FO 228/2972, Shaw Case, Vol.I および FO 228/2973, Shaw Case, Vol.II がある。これは「ショー事件」の発生から事態の解決に至るまでにやり取りされた外交文書等をまとめたものである。本項では FO 228/2972 を資料として使用した。
- 24 内田外務大臣発在中国公使他宛機密合送第 93 号「『ショウ』逮捕ニ関スル件」、大正 9 年 9 月 16 日発、外務省記録「英人『シャウ』逮捕一件」第 1 巻、4. 1. 5. 12、外務省外交史料館。
- 25 TNA, FO228/2972, from Lay to Clive, 27<sup>th</sup> July 1920.
- 26 Stursberg, *op. cit.*, p.57.
- 27 *Ibid.*, pp.57-59, p.62.
- 28 *Ibid.*, p.19.
- 29 *Ibid.*, pp. 64-65.
- 30 韓哲昊、前掲論文、2006 年、p.7, pp.10-11。
- 31 藤田拓之『居留民の上海——共同租界行政をめぐる日英の対立と協力——』日本経済評論社、2015 年、p.61, pp.139-140。
- 32 同上書、pp.148-189。
- 33 Sochi Naraoka, Japan's Twenty-One Demands and Anglo-Irish relations. in Anthony Best ed., *Britain's Retreat from Empire in East Asia, 1905-1980*, Routledge: London & NY, 2017, pp.38-43.
- 34 韓哲昊、前掲論文、2006 年、pp.12-13。
- 35 TNA, FO228/2972, from Lay to Clive, 20<sup>th</sup> July 1920.
- 36 TNA, FO228/2972, from Alston to British Ambassador to Tokyo, 8<sup>th</sup> December 1920.
- 37 内田外務大臣発在中国公使他宛機密合送第 93 号「『ショウ』逮捕ニ関スル件」、大正 9 年 9 月 16 日発、外務省記録「英人『シャウ』逮捕一件」第 1 巻、4. 1. 5. 12、外務省外交史料館。
- 38 この資料では、ショーがイギリス国籍であることについては触れられていない。朝鮮総督府法務局『朝鮮独立思想運動の変遷』p.28。
- 39 Stursberg, *op. cit.*, p.63.
- 40 *Ibid.*, p.4.
- 41 TNA, FO228/2972, from Lay to Wilkinson, 12<sup>th</sup> August 1920.

- 42 朝鮮で発行されていた日刊紙。使用言語は日本語で、朝鮮総督府の機関紙的役割を果たした。
- 43 1920年に創刊された日刊紙。記事は朝鮮語で書かれていた。
- 44 「日本の女を妻とした排日英人検挙さる」『京城日報』1920年8月11日。「朝鮮臨時政府의安東縣聯通要塞（朝鮮臨時政府の安東県連通要塞）」『東亜日報』1920年8月11日。ただし、管見の限りでは、ショーとアイルランドのつながりに言及していたのは、朝鮮半島で発行されていた新聞に限られる。日本本土で発行されていた新聞では、そもそも「ショー事件」に関する報道自体が少なく、また彼を「イギリス人」として報じるものが大多数を占めている。
- 45 NAVER 뉴스 라이브러리 (NAVER ニュースライブラリ) のサイト (<https://newslibrary.naver.com/search/searchByDate.naver>) で「애란 (愛蘭)」をキーワード検索した結果による。なお、ヒット件数が最も多かったのは、1921年で、『朝鮮日報』で139件、『東亜日報』で277件がヒットした。
- 46 例えば「愛蘭과朝鮮問題 (アイルランドと朝鮮問題)」『朝鮮日報』1920年10月9日。
- 47 ストラスバーグは、ショーの家系をアングロアイリッシュまたはスコッツアイリッシュと考えていた。Stursberg, *op. cit.*, p.4。
- 48 ロバート・ショーの兄、ウィリアム・ショー (William Shaw) は有名な劇作家ジョージ・バーナード・ショー (George Bernard Shaw) の曾祖父である。ジョージ・ルイス・ショーは、1931にジョージ・バーナード・ショーが中国を訪問した際ホストを務めた。Ibid., pp.4-5。
- 49 加えて、ショーは1912年に日本人の斎藤ふみと結婚し、2人の息子に恵まれたが、その息子たちを横浜市手町にあった聖ジョセフ・カレッジ (St. Joseph College) に通わせた。聖ジョセフ・カレッジは、1901年にカトリック教会のマリア会 (Society of Mary) が、横浜に居住していた外国人指定のために、開校したインターナショナルスクールであった。
- 50 Stursberg, *op. cit.*, pp.47-51。当時、エレンが日本人であるということを知っているのは一部の人に限られており、それゆえ「ショー事件」が起こった際、日本で発行された新聞は彼女を中国人であると報じている。また、駐日イギリス大使であったチャールズ・エリオット (Charles Elliot) も、彼女を中国人だと信じていた。なお、朝鮮総督府の資料にもエレンは中国人と記されているため、韓哲昊も2006年の論文では、エレンを中国人として紹介している。
- 51 Ibid., p.29。エレンは1857年生まれで、1877年にサミュエルと福州で結婚した。彼らが福州のイギリス領事館に婚姻届を提出したのは1879年のことだが、その時点ですでに妻の欄にアイルランド名が記入されていた。Ibid., p. xix, p. 47。
- 52 Ibid., pp. 48-49, p.56。エレンが日本とのつながりを取り戻したのは、夫サミュエルが亡くなった後のことであるとされる。ストラスバーグによると、エレンの子供たち、つまりストラスバーグの母や叔母たちは、自分の母親が日本人であるということについて知ってはいたものの多くを語りたがらず、孫たちから聞かれても長い間沈黙を守っていたという。Ibid., pp.51。
- 53 藤田拓之「上海共同租界におけるイギリス人居留民——その「上海心理」の背景」『文化史学』第58号、2002年、p.148-151。
- 54 ハリエット・サージェント著、浅沼昭子訳『上海：魔都100年の興亡』新潮社、1996年、p.161。
- 55 TNA, FO228/2972, from Wilkinson to Ray, 19<sup>th</sup> August 1920。
- 56 ショーと直接面識があった駐奉天イギリス総領事のウィルキンソン (F. E. Wilkinson) は、ショーを自分が知るユーラジアンの中で唯一、心から尊敬できる人物だと述べている。一見、ショーに敬意を払っているようにも思われるが、ショーをユーラジアンというカテゴリーに分類している点、またユーラジアンに対して差別的な偏見を抱いている点では、エリオットと同様であると言える。TNA, FO228/2972, from Wilkinson to Ray, 19<sup>th</sup> August 1920。
- 57 例えば、大英帝国統治下のインドにおいては、アイルランド人の多くは行政官や軍人として、そのインド統治を支えた。
- 58 上野格「日本におけるアイアランド学の歴史」『思想』617号、1975年。趙聖九『朝鮮民族運動と副島道正』研文出版、1998年。
- 59 両者の間に構造的な共通点を認め、それを発信していた代表的な人物としては矢内原忠雄が挙げられる。齋藤英里「朝鮮関係をアイルランド史中に読むべし——矢内原忠雄未発表『講義ノート』の検討——」『武蔵野大学政治経済研究所年報』第1号、2009年。



## 資料

Kim San and Nym Wales, *Song of Ariran: The Life Story of a Korean Rebel*, New York: John Day, 1941.  
 ニム・ウェールズ、キム・サン共著『アリランの歌』松平い子訳、岩波文庫、1987年。  
 金正明編『朝鮮独立運動 1 分冊 民族主義運動編』原書房、1964年。  
 朝鮮総督府法務局『朝鮮独立思想運動の変遷』1931年。

## [外交文書]

日本外務省記録「英人『シャウ』逮捕一件」第1巻、4.1.5.12、外務省外交史料館。  
 イギリス外務省記録 FO 228/2972, Shaw Case, Vol.I

## [新聞]

『京城日報』  
 『朝鮮日報』  
 『東亜日報』

## [ホームページ]

韓国国家報勲処ホームページ (<https://www.mpva.go.kr/mpva/index.do>)

## 参考文献

上野格「日本におけるアイアランド学の歴史」『思想』617号、1975年。  
 齋藤英里「朝鮮関係をアイルランド史中に読むべし——矢内原忠雄未発表『講義ノート』の検討——」『武蔵野大学政治経済研究所年報』第1号、2009年。  
 ハリエット・サージェント著、浅沼昭子訳『上海：魔都100年の興亡』新潮社、1996年。  
 藤田拓之「上海共同租界におけるイギリス人居留民——その「上海心理」の背景」『文化史学』第58号、2002年。  
 趙聖九『朝鮮民族運動と副島道正』研文出版、1998年。  
 Anthony Best ed., *Britain's Retreat from Empire in East Asia, 1905-1980*, Routledge: London & NY, 2017.  
 Stursberg, Peter, *No Foreign Bones in China: Memories of Imperialism and Its Ending*, The University of Alberta Press, 2002.  
 韓哲昊「조지 엘 쇼 (George L. Shaw) 의 한국독립운동 지원활동과 그 의의 : 체포·석방 과정을 중심으로 (「조지·엘·쇼 (George L. Shaw) の韓国独立運動支援活動とその意義 : 逮捕・釈放過程を中心に」)」『한국근현대사연구 (韓国近現代史研究)』제 38 집, 2006년 9월。  
 韓哲昊「1930년대 일제의 조지 엘 쇼 (George L. Shaw) 탄압, 축출공작과 그 성격 (1930年代、日本のジョージ・エル・ショー (George L. Shaw) 弾圧・追放工作とその性格)」(『한국사연구회보 제 156호 2012년 봄호』(韓国史研究彙報第 156号 2012年春号)、2011年。  
 韓哲昊「1920년대 전반 조지 엘 쇼 (George L. Shaw) 의 한국독립운동 지원활동과 그 의의 — 1920년 11월 석방 이후를 중심으로 — (1920年代前半、ジョージ・エル・ショー (George L. Shaw) の韓国独立運動支援活動とその意義 — 1920年 11月釈放後を中心に —)」(『한국사연구회보 제 160호 2013년 봄호』(韓国史研究彙報第 160号 2013年春号)、2012年。

(やまだ ともみ 教育推進機構 国際キャリア科 助教)



